

## 情報リテラシー教育と図書館の位置

### ー図書館による情報リテラシー教育実践の批判的分析と今後の展望ー

#### Education of Information Literacy and the Role of Library

#### -Critical Analysis and Future Perspective of Library's Practical Education of Information Literacy-

福井京子†

FUKUI Keiko

**概要** 本研究は、第一に近年の 10 数年間における各地の大学図書館による情報リテラシー教育の実践について批判的分析を行った。分析材料と視点は、(1) 大学図書館の各種実践報告に見られる実践の目的を整理し、(2) 実施体制とその内容を判断することによって、現在行われている情報リテラシー教育の問題点を明らかにした。第二に、情報リテラシー教育の対象者(学生)の特質や情報リテラシー保持の現状について、(1)初等・中等教育カリキュラム内容、(2) 教科「情報」履修者である高等学校卒業生の到達度を分析した。第三に、真の意味での情報リテラシーとは、情報の検索のみにあるのではなく、3 つの I、すなわち Information(情報)、Intelligence(知性)、Integrate(統合・発信)の総合的な能力にあることを論じた。最後に、こうして明らかにした情報リテラシーの内容を大学における導入教育として位置づけ、そのコアカリキュラムを提示し、情報リテラシー教育科目を図書館員が担うべきことを提言した。

**キーワード** : 情報リテラシー, メディア・リテラシー, コンピュータ・リテラシー, 大学図書館, 利用者教育

**Keywords** : Information Literacy, Media Literacy, Computer Literacy, University Library, User Education

## 1. はじめに

### 1.1. 研究の目的と意義

本研究の目的は高等教育における初期導入教育として、情報リテラシーに関する新しい教育カリキュラムを提示し、その科目を図書館員が担うべきことを明らかにすることにある。

この研究の意義は、次の 2 点にある。第一は、現在の大学教育における情報リテラシー教育が、果たして十分であるかという問題である。そもそも学生は、どのような分野を専攻しようとも、学習活動、研究活動を進めていく上で、情報リテラシーを身に着けている

ことが不可欠である。もし、それが新入学の時点で達成されていないなら、情報リテラシーを獲得するための授業が設定される必要があることになる。新入学生の情報リテラシーの現在を知ること、大学での情報リテラシー教育の歴史および現状を把握することを通して、情報リテラシー科目の必要度やあり方を検討していかなければならない。

ところで、日本の中等・高等教育の現状を見れば、大部分の学生が中等教育の時点で、高等教育に必要なリテラシーをすでに獲得しているとはいえない。大学において、情報リテラシー教育科目を設置する必要度はきわめ

---

† 創造都市研究科修士課程都市情報学専攻修了

て高い。しかし、情報化社会の進展は、学生たちの情報に関する能力を何らかの形で向上させてきた。さらに、高等学校における、教科「情報」の設置・必修化は、確実に情報リテラシー獲得に寄与してきた。したがって、大学での情報リテラシー教育科目は、それらの現実に対応したものとならざるをえない。以上の点を見据えた考察がなされる必要がある。

第二は、担当者としての図書館員という問題である。今まで、ほとんどの場合、授業科目の担当は教員が行うものとされてきた。だが、個別専門領域に関わる「情報」ではなく、「情報」そのものを学習の対象として設定するならば、「情報」に関わる専門家が授業を担当するという方策が、より有効である可能性がある。本研究は、「情報」そのものに関して図書館員がもつ優位性と、図書館が早くから進めてきた利用（者）教育について考察することによって、情報リテラシー教育の担い手の問題を論じる。

## 1.2. 研究の方法

研究の方法としては、第一に文献を中心にし、シラバスの分析、考察、聞き取り調査を行った。第二に、近年の各地の大学図書館による情報リテラシー教育の実践について分析を行った。分析材料と視点は、(1)大学図書館の各種実践報告に見られる実践の目的を整理し、(2)実施体制とその内容を整理した。次に情報リテラシー教育の対象者(学生)の特質や情報リテラシー保持の現状について、(1)初等・中等教育カリキュラム内容、(2)教科「情報」履修者である高等学校卒業生の到達度を分析した。第三に、真の意味での情報リテラシーとは、情報の検索にのみあるのではなく、3つの I、すなわちインフォメーション (Information)、インテリジェンス (Intelligence)、インテグレーション (Integration) の総合的な能力にあることに

ついて、先行論文を分析し論じた。最後に、こうして明らかにした情報リテラシーの内容を大学における導入教育として位置づけ、そのコアカリキュラムを提示するものである。

## 2. 情報リテラシー教育とは

### 2.1. 情報リテラシーについて

まず、情報リテラシーの定義を述べるために、リテラシーの検討を行った。リテラシーとは、多くの分野で使われていることばだが、その分野における基礎知識、および知識の理解力・運用力という意味をもってきた。したがって情報リテラシーとは、情報を読み解き、使う力といえる。

本研究は、高等教育機関における図書館の情報リテラシーのあり方を問題とする。まず情報リテラシーの先進国である米国の情報リテラシー論を歴史的に概観して、獲得すべき情報リテラシーを整理すると、情報リテラシーがある人とは、学習の仕方を熟知しており、問題解決能力があり、新しい情報を得るために、様々な情報源から情報にアクセスして、収集し、判断し、他者と交流したり、協力したり、表現したりするコミュニケーションを行うために必要な知識と技能を有していることを意味している。

次に情報リテラシーの近接概念を取りあげた。メディア・リテラシー、コンピュータ・リテラシーなど、情報リテラシーの近接概念を取り上げ、比較することによって情報リテラシーとの位置関係を明らかにするためである。長田らは「情報リテラシーと種々のリテラシーとの関係<sup>1)</sup>」をメディア・リテラシー、コンピュータ・リテラシー、ハイパーテキスト・リテラシー、インターネット・リテラシーのそれぞれが重なった中心に情報リテラシーを配し位置付け、「人間の情報処理プロセスの見地からこれら種々のリテラシー概念を統合したもので、種々のリテラシー概念の中核をなす<sup>2)</sup>」と考えた。また、野末は、情報リ

テラシー、メディア・リテラシー、コンピュータ・リテラシーを、「三つの概念は、視点を異にするものの、重なる部分が大き<sup>3)</sup>いとし、概念の重なりをイメージで表現するために、円の重なりで表している。しかし、コンピュータ・リテラシー、メディア・リテラシーという独立した領域は基本的には考えられない。コンピュータ・リテラシー、メディア・リテラシーも情報リテラシーとして考えるのが妥当である。

次に情報リテラシーを構造的にとらえる三人の論者について考察を行った。坂元昂の「情報能力の構造<sup>4)</sup>」、田中博之の「7つの情報能力<sup>5)</sup>」、大串夏身の「情報活用能力のモデル<sup>6)</sup>」である。坂元の情報能力概念が田中に影響をあたえ、7段階の情報を活用する能力として結実した。さらに、田中の「7つの情報能力」を修正し、大きく、入力・処理・出力に分け、入力から出力に向けて段階的に表わしたのが、大串の「情報活用能力のモデル」である。この坂元、田中、大串の概念としての情報リテラシーが4.「情報リテラシーの3つのIモデル」に影響を与えるものとなる。

## 2.2 情報リテラシー教育と大学図書館

ここでは、従来図書館で実施されてきた利用（者）教育という用語ではなく、情報リテラシー教育という用語を使う意味とさまざまな教育現場での情報リテラシー教育について述べる。新しい時代に応じた、情報リテラシーということを明確にするためには、狭いイメージから抜けきらない従来の利用（者）教育ではなく、新たな概念として情報リテラシー教育という用語の採用が適切である。さらに、情報リテラシーという言葉を使うことによるメリットとして、この用語の使用によって、どのような能力が求められるかが、明確に出来る可能性がある。なぜなら、今まで情報リテラシーという言葉で、様々な能力の獲得、構築が論じられてきたからである。

現在、さまざまな教育現場で情報リテラシー教育がおこなわれている。その中で、大学図書館の情報リテラシー教育の方法として、『図書館ハンドブック第6版』は3種の方法、すなわち学科関連指導、学科統合指導、独立科目方式<sup>7)</sup>に分類している。「学科関連指導」はほとんどの大学図書館で実施している。授業と連携している例では三重大学<sup>8)</sup>や琉球大学<sup>9)</sup>などがある。「学科関連指導」の問題点は、報告書<sup>10)</sup>も指摘し、筆者の経験からも同意できるが、時間数に限りがあるため、聞くだけの授業となる、また1回くらいの実習では、情報リテラシー能力の定着は困難であるという問題点をもつ。「学科統合指導」は、従来から医学・薬学系の図書館で先駆的に取り組んでいるところが多い。名古屋大学医学分館<sup>11)</sup>の例などにに基づき、問題点をあげると、大学教育を全うするには、専門教育から情報リテラシー教育を行うのではなく、導入教育段階の充実を図る必要があるということを看過していることである。「独立科目方式」では京都大学<sup>12)</sup>、東北大学<sup>13)</sup>、名古屋大学<sup>14)</sup>、金沢大学<sup>15)</sup>、明治大学<sup>16)</sup>、嘉悦大学<sup>17)</sup>、慶應義塾大学（三田メディアセンター）<sup>18)</sup>、慶應義塾大学（日吉メディアセンター）<sup>19)</sup>、慶應義塾大学（湘南藤沢〈SFC〉メディアセンター）<sup>20)</sup>、<sup>21)</sup>などがあげられる。慶應義塾大学（湘南藤沢〈SFC〉メディアセンター）を除けば、いずれも教員と図書館員の連携で授業が運営されている。例えば、1998年から実現し、現在も継続している京都大学の事例「情報探索入門」では、開講年から10年経過した今でもシラバスの内容はほぼ、同じであった。内容についても情報リテラシー教育の一部を扱うに過ぎず、論文執筆、プレゼンテーションなどについては、触れられていない。開講当初は全国的にも評価されたが、10年の変化に対応するためにも早急にシラバスの内容を改変し、図書館のもつ教育的役割を考え、新たな情報リテラシー教育を築く必要がある。慶應義塾

大学、湘南藤沢〈SFC〉メディアセンターの「資料検索法」は初期導入教育の情報リテラシー教育として評価できる。しかし、これを支えるのは、SFCの特異性である。創立当初の1990年から、図書館をメディアセンターと呼び24時間図書館利用体制をしき、学生による授業の評価制度、教員がシラバスを学期の初めに提示することなどが開校当初から、先進的に実施され、また、1998年に慶応義塾大学湘南藤沢キャンパスに対する評価委員会「SFC外部評価委員会」も本格化されている。このように教員、職員の意識の高さが図書館員のみによる授業を可能にし、2005年から継続できているゆえんであろう。

### 3. 初等・中等教育における情報教育

初等・中等教育における情報教育の現状を考察した。1985年の臨時教育審議会第1次答申で「情報を使いこなす力を身に付ける<sup>22)</sup>」必要性が説かれて以降、情報リテラシー教育が追求されてきた。1996年中央教育審議会第1次答申はいわゆる「生きる力」の養成を学校教育の中心課題に掲げる中で、情報化に対応した能力育成の方針を打ち出した。この答申を受けて、1998年告示の小学校および中学校学習指導要領、1999年告示の高等学校学習指導要領は、情報教育の充実を計り、各教科においてコンピュータ等の情報手段の活用を促し、また、特に情報教育を担う科目として、中学校では、「技術家庭」を位置付け、高等学校では、教科「情報」を新設した。中学校「技術家庭」では、コンピュータ操作について学ぶとともに、情報化の社会的意味や情報モラルも学習課題とされている。高等学校の教科「情報」は「情報A」、「情報B」、「情報C」のいずれか1つを必須とし、「情報A」では「情報活用の実践力」、「情報B」では「情報の科学的な理解」、「情報C」では「情報社会に参画する態度」が目標とされている。

では、大学入学前の生徒の履修状況はいか

なるものか、いくらかの解明を行いたい。教科書採用数から出された選択割合は「情報A」80%強、残りを「情報B」と「情報C」<sup>23)</sup>がほぼ同数で分ける。配当学年を、1学年とするものは、東京公立校40%弱、大阪公立校で50%強にすぎず<sup>24)</sup>、早い学年に配当して、他の科目に役立てるとの設立趣旨が十分には生かされていない。授業の実例の調査は少ないが、やはり内容的に容易な「情報A」が多いため、コンピュータ操作が中心的となり、せいぜいホームページ作成、パワーポイントによるプレゼンテーションまでである。大学新入生の理解状況は、先にあげた高等学校教科「情報」の3つの学習目標に関する理解状況調査によれば、実践力73.0%、科学的理解63.5%、参画態度59.6%<sup>25)</sup>であり、この調査の実施者・西野和典らによる評価は「初等教育段階から実習を中心とした学習活動がなされ、その集大成として高校において理解的背景の学習を行うことで、関連する知識の整理と定着が着実になされている<sup>26)</sup>」である。しかし、知識定着や、学習領域のバラツキ、科学的理解に関しての学習認識が低いなど不十分な点も報告されている。今後は、中等教育で不十分だった「情報の科学的な理解」、「情報社会に参画する態度」を含めた展開が大学教育に必要なものとなる。もちろん、今後予想される、初等・中等学校での情報教育の進展は、大学教育の内容にさらなるレベルアップを要求するであろう。

### 4. 情報リテラシーの3つのIモデル

高等教育における情報リテラシー教育に関するカリキュラムを展開するにあたって、基礎となる情報リテラシーの概念について論じ、「情報リテラシーの3つのIモデル」を「インフォメーション」「インテリジェンス」「インテグレーション」として提示した。

図1のように第1ステップである「インフォメーション」において収集・理解・選択さ

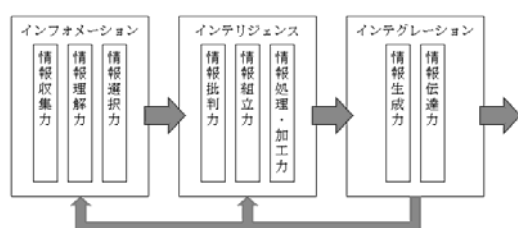


図1「情報リテラシーの3つのモデル」

れた情報は、第2ステップである「インテリジェンス」において、体系化・組織化される。さらに、第3ステップである「インテグレーション」において、外部に発信・伝達されていくという関係にあることを示した。

第1ステップである「インフォメーション」の下位概念として、「情報収集力」「情報理解力」「情報選択力」をあげた。「情報収集力」は自分の課題解決に必要な情報要求を言語化すること、そして言語化された情報要求に対して適切な情報源（資料・情報）の選択を行うことである。「情報理解力」は情報源から得られた情報を読み解く力である。「情報選択力」は獲得し読み解いた情報を取捨選択する能力である。得られた情報には矛盾する事実もあるだろうし、ひとつの事象や社会現象に対して異なる主張は多くある。こうした互いの矛盾した情報に対して選択結果を自分の内部に取り込んでいく処理能力である。

第2ステップである「インテリジェンス」の下位概念として「情報批判力」「情報組立力」「情報処理・加工力」をあげた。「情報批判力」は情報が生成、発信される過程について背景を理解し、当該情報の位置を読み解く力、といえる。「情報組立力」は自己の中に取り込んだ情報相互の関係性の構図形成能力と定義したい。課題に対して各種の情報を批判的に読み解き、取り込んだ後の処理能力である。「情報処理・加工力」は自己の中に取り込んだ情報相互の関係性の構図形成が終わった情報群を比較したり、より対象が鮮明、明快になるように加工する思考過程である。

第3ステップである「インテグレーション」

の下位概念として「情報生成力」「情報伝達力」をあげる。「情報生成力」は獲得した情報を自らの観点から分析・再構成し、そこから、新しい情報を生成する、つまり情報の編集と再構成をする能力のことである。「情報伝達力」は自己の生成した情報を、正確かつ効果的に他者に伝える能力である。報告書やレポートのように文献による場合もあれば、プレゼンテーションのようにリアルタイムで伝える必要があるときも存在する。学生の思考過程を情報処理システムとして仮想すると、いわば前の2段階の「インフォメーション」はシステムへのインプット過程であり、「インテリジェンス」はシステム内部での処理、考察段階である。「インテグレーション」は、前二者の段階を受けて、知的生産物をアウトプットする総合的な段階である。

## 5. 導入教育としての情報リテラシー教育

ここでは、ALAによる「高等教育のための情報リテラシー能力基準（Information Literacy Competency Standards for Higher Education）」及び、日本図書館協会による「図書館利用教育ガイドライン：大学図書館版」をふまえた上で、大学における情報教育の一環として、今後発展が望まれる独立科目としての情報リテラシー教育に関するカリキュラムを提示する。

ALAによる高等教育のための情報リテラシー能力基準（Information Literacy Competency Standards for Higher Education）は、すべての学生に求められる情報リテラシーを基準として設定し、その到達度を測るようにしたものである。表1に示す。この点について日本図書館協会による「図書館利用教育ガイドライン：大学図書館版」の特徴は、ACRL（Association of College and Research Libraries：米国大学研究図書館協会）の情報探索法指導ガイドライン

(Guidelines for Bibliographic Instruction in Academic Libraries, 1977) の考え方を参

基準	内容
基準 1	情報リテラシーのある学生は、必要とする情報の性質と範囲を決めることができる。
基準 2	情報リテラシーのある学生は、必要とする情報に効果的・効率的にアクセスすることができる。
基準 3	情報リテラシーのある学生は、情報と情報源を批判的に評価し、選択した情報を自分の知識ベースと価値体系に組み込むことができる。
基準 4	情報リテラシーのある学生は、特定の目的を達成するために個人もしくはグループの一員として、情報を効果的に利用することができる。
基準 5	情報リテラシーのある学生は、情報の使用に関する多くの経済的、法的、社会的問題を理解し、倫理的、法的（法を遵守して）に情報にアクセスし利用することができる。

表 1 「高等教育のための情報リテラシー能力基準」における基準

考にし、その基本にある非営利機関のマーケティング (non-profit marketing) の理論を取り入れている点にある。表 2 に示すが、近

領域	内容
領域 1	印象づけ 各自の情報ニーズを満たす社会的機関として図書館の存在を印象づけ、必要が生じた場合に利用しようという意識を持つようにする。
領域 2	サービス案内 各自の利用する図書館の施設・設備、サービスおよび専門的職員による支援の存在を紹介し、その図書館を容易に利用できるようにする。
領域 3	情報探索法指導 情報の特性を理解すると同時に、各種情報源の探し方と使い方を知り、主体的な情報探索ができるようにする。
領域 4	情報整理法指導 メディアの特性に応じた情報の抽出、加工、整理、および保存ができるようにする。
領域 5	情報表現法指導 情報表現に用いる各種メディアの特性と使用方法を知り、目的に合った情報の生産と伝達ができるようにする。守るべき情報倫理を伝える。

表 2 「図書館利用教育ガイドライン：大学図書館版」

年の情報環境の急激な変化や、日本での社会的な図書館認知度等を考慮して、ACRL ガイドラインの「情報探索法指導」領域を中心に据え、その前に「印象づけ」(User Awareness) と「サービス案内」(Orientation) の 2 領域を追加し、またその後に「情報整理法指導」と「情報表現法指導」の 2 領域を追加して、合計 5 領域の構成としたことも特徴としてあげられる。

日本図書館協会による「ガイドライン」と図書館ガイダンス、図書館による各種講習会及び独立科目それぞれを対応させると表 3 の

ガイドラインによる領域	大学における情報リテラシー教育
領域 1	印象づけ
領域 2	サービス案内
領域 3	情報探索法指導
領域 4	情報整理法指導
領域 5	情報表現法指導

表 3 大学における情報リテラシー教育

ようになるであろう。大学における情報リテラシー教育は、独立科目によってのみ担われるものではない。独立科目としての情報リテラシー教育は、図書館の基礎的な利用方法を

紹介する「図書館ガイダンス」、蔵書検索システムや文献データベースの使い方、文献収集法など、それぞれのテーマに応じて開催される「図書館講習会」とあいまって、相乗効果をもたらすものである。

ALA による「高等教育のための情報リテラシー能力基準」及び日本図書館協会による「図書館利用教育ガイドライン：大学図書館」をふまえた上で、高等教育における基礎的な情報リテラシー教育に関するカリキュラムを提示し、各プロセスの到達目標と「ガイドラン」との関係性をまとめると表 4 のようになる。

3つのモデル	各プロセスの到達目標	ガイドライン	基準
インフォメーション	情報収集力	必要な情報にたどり着く方法及び関連する技術的な側面を理解する。	情報探索法指導 (領域 3)
	情報理解力		
	情報選択力		
インテリジェンス	情報批判力	獲得した情報をメディアの編集意図をも察知して自己の内部において外部情報を評価、判断できるようにする。	情報整理法指導 (領域 4)
	情報組立力		
	情報処理・加工力		
インテグレーション	情報生成力	自己の知的生産物のアウトプット、すなわち自己の課題と情報要求の統合法を習得する。	情報表現法指導 (領域 5)
	情報伝達力		

表 4 各プロセスの到達目標と「ガイドライン」及び「基準」との関係

「インフォメーション」「インテリジェンス」「インテグレーション」というそれぞれの情報リテラシーのプロセスにおける到達目標および、「ガイドラン」「基準」との関係性を表し、これらの到達目標に達するためには、講義だけでなく、適宜、演習を組み合わせしていく必要がある。次に、これらの到達目標を達成するための道標として、表 5 のような 6 つ

実践のプロセス 1	テーマを絞り込む
実践のプロセス 2	資料・情報を集める
実践のプロセス 3	資料・情報を読み解く
実践のプロセス 4	レポート、論文の執筆とプレゼンテーション術
実践のプロセス 5	レイアウトの工夫や電子提出
実践のプロセス 6	作法に則ったレポート・論文の作成

表 5 道標としての 6 つの実践のプロセス

の実践のプロセスを設定する。なお、ここで刃、基本的な情報リテラシー教育として、論文やレポートを書くためのスキルや関係知識を学ぶことを前提としている。こうしたモデルプロセスは線形進行過程をもつものではなく、現実にはプロセスの初期時点に戻ったり、情報検索アプローチの修正や絞込みを行った

り、同一段階の繰り返しを行うものである。いわゆる「Plan－Do－See－Check」の認識プロセスでありその中でより高次レベルの情報の評価・統合と知識の抽象的操作方法を獲得していくことになる。最後に、表6にシラバス（案）を提示する。

大学図書館としての存在価値の有用性が、自明であった時代は終焉を迎えたといっても過言ではないであろう。今、大学図書館にとって、必要なものは、自分達の、学内、学外に対する、図書館の位置についての実証的な説明理論である。そのとき、情報リテラシー教育は、図書館の存在意義を明確にする1つの大きな役割を果たすはずである。野末が紹介している、ウェイン州立大学の図書館では、図書館員がコーディネーターを含め、プログラムの計画からテキスト作成まで関わっている<sup>27</sup>。

この例のように米国大学図書館の情報リテラシー教育は、大学教育の中核的な理念として位置づけられようとしている。米国に比べれば、まだ、発展途上であるが、私たちの向かう目的・目標であることは間違いないだろう。

情報リテラシーへの招待：大学生のためのレポート、論文の執筆とプレゼンテーション術	
担当教員等の所属	附属図書館
開講学年	1～2年
開講学期	前期
単位数	2単位
開講形態	講義・演習
担当教員	
<b>【授業内容】</b> 本科目は、情報リテラシーの基礎を身につけるための科目である。具体的には、1)テーマを絞り込むスキル、2)資料・情報を集めるスキル、3)資料・情報を読み解くスキル、4) レポート・論文の執筆とプレゼンテーション術、5)レイアウトの工夫や電子提出、6)作法に則ったレポート、論文を作成するための法則、を学ぶことによって、レポート・論文を書くための基礎スキル・知識を各得する。講義と演習を適時に組み合わせ、「頭での理解ではなく腑に落ちる理解」を得る。	
<b>【到達目標】</b> 携帯電話や情報端末でメールや Web サーフィンを行うのが日常化している。しかし今のインターネット時代において案外置き去りになっているのが私たちの知の構築にどのように役立てるのかという課題である。科目の到達目標は、現在のハイブリッド情報環境下において、次の3つの柱を軸として進める。1)必要な情報にたどり着く方法及び関連する技術的な側面の理解、2)獲得した情報をメディアの編集意図をも察知して自己の内部において外部情報を評価、判断ができる。3)自己の知的生産物のアウトプット、すなわち自己の課題と情報要求の統合であり、具体的には、レポート、論文の執筆やプレゼンテーション術の獲得である。	
<b>【授業計画】</b> 1. 総論（講義） 授業全体の進行計画を説明する中で、科目目標に記した3つの柱の必要性や授業内容において述べた6つのステップについて、具体的な事例を示しながら講義を行う。 2. 課題を理解し、テーマを設定するための情報探索（講義と演習） 与えられたテーマについて、より具体的なテーマを設定する必要性とその方法について取り扱う。 3. 個々の情報源へのアプローチ（講義と演習） 図書、雑誌・新聞などの所蔵調査とその利用法やインターネットでのアクセスが可能な二次情報データベース、電子ジャーナル、主題リンクサイト、検索エンジン、情報資源などへのアプローチ 4. 情報整理法（講義と演習） 入手した情報をどのように評価し、整理していくかを講義と演習で実感する。 5. レポート・論文の執筆の注意事項やプレゼンテーション資料作成法（講義と演習） 収集・評価が完了した情報の材料の調理段階であり、グループ単位で課題をまとめる。 6. 作法に則ったレポート・論文の作成 課題のまとめの前に、電子文房具の使い方、レイアウトの工夫や電子提出、しっかりとしたレポート、論文を作成するための法則を事例で学習する。	
<b>【評価方法】</b> 授業参加態度、課題発表内容、課題提出レポートにより評価する。	

表6 シラバス「情報リテラシーへの招待」

## 謝辞

本稿を書き上げるにあたり、大阪市立大学大学院創造都市研究科の北 克一教授および大阪市立大学大学院創造都市研究科博士課程の呑海沙織氏には、資料の示唆、論文執筆の指導など、一方ならぬお世話になりました。記して謝意を表したいと思います。

---

<sup>1</sup> 長田秀一，菊池久一，板垣文彦『情報リテラシー教育－コンピュータリテラシーを超えて－』サンウェイ出版，1999，p. 61 の図 3－3.

<sup>2</sup> 前掲 1，p. 60.

<sup>3</sup> 野末俊比古「第 5 章情報リテラシー」『情報探索と情報利用』勁草書房，2001，p. 269（図書館・情報シリーズ 2）

<sup>4</sup> 坂元昂「情報教育への展開」『授業研究情報 4』明治図書，1987，p. 14.

<sup>5</sup> 田中博之「中学校の課題研究」『子どもの情報能力を育てる』ぎょうせい，1988，p. 68.

<sup>6</sup> 大串夏身「情報メディアの意義と活用」樹村房，1999，p. 62（学校図書館実践テキストシリーズ 1）

<sup>7</sup> 日本図書館協会図書館ハンドブック編集委員会編『図書館ハンドブック第 6 版』日本図書館協会，2005，pp. 95－96.

<sup>8</sup> 杉田いづみ，河谷宗徳，後藤美由紀「三重大学附属図書館の情報リテラシー教育支援」『情報の科学と技術』52（11），2002，pp. 569－574.

<sup>9</sup> 上原恵美「琉球大学附属図書館における情報リテラシー教育」『大学図書館研究』54，1998，pp. 55－65.

<sup>10</sup> 山田かおり「図書館利用教育の評価：嘉悦大学 1 年生を対象としたアウトカム測定の試み」『大学図書館研究』73，2005，p. 15.

<sup>11</sup> 附属図書館医学部分館（文責 安井裕美子）「医学部分館の情報リテラシー教育支援」『名古屋大学附属図書館 館燈』150，2004，

pp. 3－4.

<sup>12</sup> 慈道佐代子「情報リテラシー教育への参画 全学共通科目『情報探索入門』の試み－図書館の役割について（学術情報提供と次世代図書館サービス－大学図書館の今後の戦略）－」（分科会第 2 分科会：大学図書館アイデンティティ）『大学図書館研究集会記録』17，2000，pp. 104－108.

<sup>13</sup> 菅原透，佐藤初美，米澤誠「情報探索マニュアル作成を軸とした情報リテラシー教育の展開とオープンソースの試み」『医学図書館』52（1），2005，pp. 25－30.

<sup>14</sup> 「生命農学図書室における新たな取り組み」『名古屋大学附属図書館 館燈』150，2004，pp. 5－6.

<sup>15</sup> 橋洋平「金沢大学附属図書館中央館における利用者教育」『大学図書館研究』39，1992，pp. 55－62.

<sup>16</sup> 大野友和「図書館サービスとしての図書館利用者教育：明治大学図書館における利用教育の実践をふまえて」『図書館の譜：明治大学』（7）2003，pp. 17－34.

<sup>17</sup> 前掲 10，p. 15－24.

<sup>18</sup> 岡田孝子「法学情報教育における情報リテラシー概念の必要性」『大学図書館』76，2006，pp. 62－73.

<sup>19</sup> 平尾行蔵，布目和美，山田雅子，藤井康子「大規模大学の 1～2 年生に対する情報リテラシー教育とメディアセンター」『大学図書館研究』54，1998，pp. 33－42

<sup>20</sup> <http://info-literacy.sfc.keio.ac.jp/>（2007.8.5 確認）

<sup>21</sup> 市古みどり，上岡真紀子「情報リテラシーのためのウェブチュートリアル開発：KITIE（keio Interactive Tutorial on Information Education）の事例」『医学図書館』54（1），2007，pp. 37－41.

<sup>22</sup> 「臨時時教育審議会 教育改革に関する第 1 次答申」『文部時報』第 1327，1987，p. 66.



---

<sup>23</sup> 生田茂「教科『情報』の現状——教科書採用データの分析」『筑波大学学校教育論集』28, 2006. 3, pp. 1-6.

<sup>24</sup> 前掲 22, p. 3.

<sup>25</sup> 西野和典, 香山瑞恵, 布施泉, 高橋参吉「大学新入生の教科『情報』に関する知識の調査と考察 (情報教育と学習支援システム／一般)」『電子情報通信学会技術研究報告. ET, 教育工学』106 (249) 2006. 9, p. 31.

<sup>26</sup> 前掲 24, p. 31.

<sup>27</sup> 逸村裕, 竹内比呂也『変わりゆく大学図書館』勁草書房, 2005, p. 49.